

3.1.3 学生の受け入れ

<2003年度に設定した目標>

1. 入試制度改革を実施し、より多様性のある学生を確保できるようにする。
2. AO（アドミッション・オフィス）入試制度による選抜を拡大する。
3. スポーツ能力および文化・芸術活動に優れた者を対象にした入試制度による選抜を拡大する。

【評価項目 5-0-1】 入学者受け入れ方針等

（必須要素）入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係

（必須要素）入学者受け入れ方針と入学者選抜方法、カリキュラムとの関係

（選択要素）学部・学科等のカリキュラムと入試科目との関係

（現状の説明）

社会学部は、「真理は汝らに自由を得さすべし」という聖句を基本精神としながら、社会学と社会福祉学を核にして現代社会を科学的に探求することを通じ、今日の社会に具体的な貢献を成し得る人材を育成することをめざしている。

社会学・社会福祉学とは、人と人の関係、家族・学校・企業やさらには地域・国家といった集団と人の関係、そしてそれらの集団と集団間の関係の中から生じるさまざまな事象に学際的にアプローチし、より理想的な社会のあり方を模索していく学問である。とりわけグローバル化や高度情報化が進んだ現代社会の本質を探究するためには、既存の研究領域にとらわれない柔軟でバランスのとれた思考力、自主的な行動力、そして鋭い観察力や分析・検証能力が必要である。

社会学部の入学者受け入れ方針は、大学の教育理念・目的および社会学部の教育理念・目的に基づき、加えて文部科学省の「大学入学者選抜実施要領」に則っており、幅広い関心と鋭い問題意識を有し、社会のさまざまな領域で、その能力を十分に発揮できる人材を育てるために、意欲に満ちあふれ、さまざまな適性を有した多様で幅広い学生たちを受け入れることを基本的な方針にしている。

2003年度に新たに策定された「大学第三次中長期計画」とアクションプログラムにおいて、「関西学院大学にふさわしい人材の確保」があげられ、2003年度の入試委員会においては「学生の多様性と質の確保」を目指すことを入試改革の目標とした。社会学部でもその基本方針を踏まえ、学生の多様性確保のために、一般入試比率を下げ、その他の入試募集人員枠を増加させた。多様性の確保のためには、多様な形態の入試を実施することが求められるため、社会学部ではすでに、帰国生徒入試、外国人留学生入試を実施してきているが、AO入試とスポーツ能力に優れた者を対象とする特別推薦入試枠を拡大させた。

一般入試および大学入試センター試験を利用する入試は、各学部での教育に必要な「総合的な基礎学力を持つ受験生を選抜する」ものである。一方、AO入試、スポーツ推薦入試などの多様な入試は、「大学教育を受けるための基礎学力があることを前提として、多様な能力、さまざまな経験や活動をとおして身につけた豊富な人間性や実績などを多面的に評価」するものである。

入学者受け入れ方針と各学部のカリキュラムとの関係については、一般入試の入試科目において、社会学部では、英語、国語を必須の受験科目とし、選択科目として数学、日本史、世界史、地理から1科目を選択するようにしている。英語を重視しており、配点は英語200点、国語150点、選択科目100点である。一般入試以外の各種入試では、指定校推薦、AO（自己推薦）、AO（帰国生徒）、外国人留学生、スポーツ推薦、編入学について、審査内容を違えており、多様性のある人材の入学の促進を狙っている。

（点検・評価の結果）

各入試別の点検・評価の結果は次のとおりで、円滑に進んでいる。

1. 2006年度の一般入試とその他の入試の募集人員は、一般入試400名、センター試験利用入試50名、指定校推薦90名、高等部推薦25名、スポーツ推薦25名、AO入試（自己推薦）60名、AO入試（帰国生徒）若干名、外国人留学生 若干名、である。一般入試の占める割合が減少しており、募集人員の割合を変更する改革が進みつつある。多様性のある学生の確保に向けて前進している。

2. AO入試の導入状況について

AO入試は、本来「詳細な書類審査と時間を掛けた丁寧な面接等を組み合わせることによって、受験生の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判定する方法」（文部科学省・大学入試選抜要領）とされているが、社会学部では、「時間を掛けた丁寧な面接」の実施などで、2005年度AO入試で63名が入学している。

3. 各入試方法別の追跡調査について

2005年度から各入試方法別の入学者の追跡調査を実施し、どの入試方法が実績をあげているかを検証するが、こうした取り組みにより募集人員の見直しにも役立てることができるようになった。

4. 大学入試センター試験を利用する入試について

高校の進路指導が大学入試センター試験に重点を置く傾向は、いわゆる進学校のみならず、幅広く浸透してきている。私立大学受験には試験問題の傾向対策が不可欠であるが、大学入試センター試験を利用すれば傾向対策が不要なため受験生の負担が軽減化されることになる。社会学部では、2005年度入試から4～5教科型および3教科型（1月出願）を採用して対応をすることにした。

（改善の具体的方策）

2006年度入試から大学入試センター試験利用の入試として1月出願の4～5教科型・募集人員25名、3教科型・募集人員25名、を実施する。

【評価項目 5-0-2】 学生募集方法、入学者選抜方法

（必須要素）大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学者選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性

（現状の説明）

2003年度および2004年度に実施された入試（2004年度および2005年度入試）には、一

般入試（F日程、A日程）、大学入試センター試験を利用する入試、AO入試、推薦入学（高等部、指定校）、スポーツ推薦入試、帰国生徒対象入試、外国人留学生入試、および編入試・転入試があった。これらの具体的内容については、大学案内誌『空の翼』、『入試ガイド』や『入試要項』に明記し、広く公表している。

1. 一般入試

一般入試は「各学部の教育を受けるにふさわしい基礎学力を有する受験生を選抜するもの」と位置づけて、全学的に実施している。本学の入試の主軸をなす入試で、社会学部での募集人員でも最も多い。毎年2月1日に神学部を除く社会学部も含めた7学部がF日程入試を実施し、2日以降に、社会学部単独のA日程入試を実施している。すなわち、受験する機会は、F日程とA日程で2度ある。

入試科目は、3科目入試である。私立大学の入試科目はほとんどが3科目入試で、国公立大学に比べ試験科目が少ないため、いち早く私立大学に絞って勉強している受験生は少なくない。

2. 大学入試センター試験を利用する入試

大学入試センター試験を利用する入試は、「本学独自の一般入試とは異なるタイプの受験生を獲得するための入試制度」と位置づけている。2004年度入試まで2月出願のみであったが、2005年度入試から社会学部では積極的に早い段階からの出願を奨励することとし1月出願を実施した。

3. AO入試

2005年度から社会学部では、多面的な評価をとり入れたAO入試を導入し、多様な学生が入学できるように面接により筆記試験のみでは把握できない個人の能力や特性を評価できるようにしている。

4. 推薦入試

推薦入試は、本学を第一志望とする者を対象としているため、帰属意識が高い受験生を獲得できるなどの利点がある。具体的には、①高等部からの院内推薦入学、②院外の高등학교（事前に審査し指定）からの推薦入学制度である指定校推薦入学、がある。

5. スポーツに優れた者を対象とする推薦入試

社会学部ではAO入試と称してこなかったが、これまで「文化・芸術・スポーツ活動・ボランティア活動に実績を持つ者の特別選抜入試」を行ってきた。2005年度入試より、全学的なAO入試制度が整備されたことに鑑み当該入試を全学的制度に統合させ、また全学的に取り組まれている「スポーツに優れた者」を対象とする入試を実施している。

（点検・評価の結果）

本学では、「学生の多様性と質の確保」を目指して、多様な入試方法を採用してきた。入試方法ごとの点検・評価の結果はつぎのとおりで、円滑に進んでいる。

1. 一般入試について

地方試験を全国13試験地で開催しているが、近畿地区の入学者割合が依然として高い。社会学部は女性の入学者比率が他の学部より高いが、経済的な面から地元指向が強だけでなく、親元から通学できることが結果的に女性の入学者を多くしている。これまで

以上に全国の受験生を迎える方策は必要である。

2. 大学入試センター試験を利用する入試について

大学は学力検査においても多様な選抜方法を設定しておくことが肝要で、多様な可能性のある受験生を確保するためには、大学入試センター試験を利用する入試は不可欠であると考え、社会学部では、1月出願について、3教科型と4～5教科型のいずれでも受験できるようにしている。

3. AO入試について

AO入試により、学力試験では評価できない、本人の個性や意思あるいは資質そして経歴などを評価することができ、多様な人材を入学させることが可能となるが、実際の選考実務をより効率的にするため、今後入試部との分担や方法などについて再検討が必要である。

4. 指定校推薦入試について

指定校推薦のメリットは、多様な学生を入学させるひとつの選考方法であるだけでなく、本学・学部を第一志望とし、帰属意識が強い学生を迎えることである。具体的には、2006年度入試から同制度の入試枠を30名から90名に拡大させた。

(改善の具体的方策)

これまでの取り組み同様に、優秀な学生、優れた能力や素質を持った学生、本学にふさわしい資質の学生など数多くの受験生を集めることをめざすことには今後も変わりはない。

特に、2006年度入試が新課程入試でもあり、一般入試および大学入試センター試験利用入試において次のような改革を行う。

1. 一般入試

- ・ F日程とA日程の募集人員を分割する。

2006年度から、F日程140名、A日程260名を分割して募集する。

- ・ F日程の配点は、英語200点、国語200点、選択科目150点、とする。
- ・ F日程の英語および国語の出題を全問マークシート方式とする

2. 大学入試センター試験を利用する入試

- ・ 3教科型、4～5教科型の1月出願を実施する。

3. 推薦入試については、追跡調査を実施する。

【評価項目 5-0-3】 入学者選抜の仕組み

(必須要素) 入学者選抜試験実施体制の適切性

(必須要素) 入学者選抜基準の透明性

(選択要素) 入学者選抜とその結果の公正性・妥当性を確保するシステムの導入状況

(現状の説明)

一般入試は、入試本部のもと、社会学部で実行小委員会を編成し実施している。入学試験業務を適切に実施するために、社会学部用として「入学試験実施要領」、「監督者の手引き」などを関係者に配付して実施している。試験終了後には、試験の実施や出題内容について検討会を開催し改善すべき点を明確にしている。また、一般入試以外の入試は、社会

学部の求める学生像を明確にするとともに、教授会に各入試についての委員会を設置し、書類審査、論述審査、面接審査などにより適正に選抜を行っている。合否判定については教授会で審議し決定している。

具体的状況を2005年度入試でみると、募集定員は、社会学科と社会福祉学科、それぞれ、475名、175名であった。募集は、一般入試（含、大学入試センター試験を利用する入試）、AO入試、高等部推薦入試、指定校推薦入試、スポーツ推薦入試、外国人留学生に分かれている。入学者実績を、学科別にみると、社会学科は、それぞれ、350名、44名、34名、10名、28名、3名、合計469名、社会福祉学科は、それぞれ、135名、19名、6名、8名、3名、3名、合計174名であった。（大学基礎データ表15 参照）

<2005年度社会学部入試>

学部	学科		入学者数						計
			一般入試	AO入試	高等部推薦	指定校推薦	スポーツ推薦入試	外国人留学生	
社会学部	社会学科	入学定員	375	40	20	15	25	若干名	475
		入学者数	350	44	34	10	28	3	469
		計に対する割合	54.4%	6.8%	5.3%	1.6%	4.4%	0.5%	72.9%
	社会福祉学科	入学定員	135	20	5	15	若干名	若干名	175
		入学者数	135	19	6	8	3	3	174
		計に対する割合	21.0%	3.0%	0.9%	1.2%	0.5%	0.5%	27.1%
計	入学定員	510	60	25	30	25	若干名	650	
	入学者数	485	63	40	18	31	6	643	
	計に対する割合	75.4%	9.8%	6.2%	2.8%	4.8%	0.9%	100.0%	

注) 1. 帰国生徒対象の入試を2005年度よりAO入試で実施している。
2. 大学入試センター試験を利用する入試は一般入試に含めている。

(点検・評価の結果)

入試実行において、入試の反省を次年度に反映させたマニュアルを作成している。現在、社会学部では、入試実行のほか出題に問題があるなどのミスは発生していない。今後もミスなく継続して実施できるように細心の注意を払って取り組む。

なお、万が一に備えて、2004年度入試から入試問題について学外有識者（外部機関）に問題の確認を依頼している。

出題・採点については、高校、予備校からも難問奇問のない入試問題であるとの評価を得てきており、とくに問題はない。

(改善の具体的方策)

今後もチェック体制をさらに整え、入試におけるミスをなくす努力を行う。入試問題についての学外有識者による問題確認を継続し、出題ミスの回避に努める。

また、社会の状況の変化に敏感に対応するとともに、先取りした対応を行うように努める。

【評価項目 5-0-5】 アドミSSIONズ・オフィス入試
(選択要素) アドミSSIONズ・オフィス入試実施の実効性

(現状の説明)

これまでの「文化・芸術・スポーツ活動・ボランティア活動に実績を持つ者の特別選抜入試」を2005年度入試より、AO入試として実施し、多様性があり、本学で学びたいという意志を持つ本学にふさわしい能力・適性を持った学生の確保が図れるように取り組んでいる。

実際のAO入試業務では、AO入試課と連携をとり、入学願書受付、出願資格審査は入試部AO入試課で行い、論述審査等および第2次審査は社会学部で行っている。

なお、社会学部のアドミSSION・ポリシーは、「課外活動や地域社会での活動などの実績を有し、自己の持つ個性的な能力の一層の練達を目指す人」として、社会学部の求める学生像を明確にしている。

(点検・評価の結果)

AO入試を導入し、概ね円滑に実施されている。なお、2005年度はAO入試制度を導入して1年目であり、また2005年度より調査を始めたが継続的な調査結果はない。

(改善の具体的方策)

「AO入試」を導入する際の課題として、志願者の学力担保の精度があげられるが、AO入試では、意欲の高い第一志望の受験生（専願者）を獲得でき、学力検査のみでは測れない「総合力」を見ることができるといった、メリットがある。一般入試の比重が低下し、各種入試が多く実施されるなかで、選考方法をどのような形式にすれば、AO入試にふさわしい多様性のある合格者がより多く確保されるかを検討する必要がある、この点さらに検討を重ねる。

「AO入試」は各学部のアドミSSION・ポリシーに基づき独自性を出す入試方法と考えられる。現行では大学（入試部）と学部とがよりよき協力のもとで実施されているが、今後は学部独自に必要な要件要素についても検討をさらに加え、よりよい選抜ができるようにしていく。

【評価項目 5-0-9】 科目等履修生、聴講生等
(選択要素) 科目等履修生、聴講生等の受け入れ方針・要件の適切性と明確性

(現状の説明)

科目等履修生、聴講生の受け入れは、社会人にとって関心の高い講義が多いことに加えて、生涯学習への場の提供としてオープンカレッジ生の受け入れも行っており、社会に勉学のを広く提供している。また、受け入れの許可は応募された方を面談の上で受講を許可している。

なお、科目等履修生、聴講生、オープンカレッジ生（社会人）の実績は、次のとおりで

ある。

	2004年度	2005年度
科目等履修生	19名	3名
聴講生	12名	10名
オープンカレッジ生	4名	3名

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

科目等履修生、聴講生、オープンカレッジ生などの受け入れ、教育について、概ね順調に推移している。